

# 2023 12

## 「出逢いと別れ」

今年も懲りずに映画を観せることに取り組んだ一年だった...。「コロナ」以降、いせフィルムが自ら主催する自主上映が多くなった。自分たちが上映をやり続けることで、自主上映活動を焚き起こそうと考えてのことだ。けれども、まだまだ客足は戻って来ていない。やればやるほど赤字が増えるばかり、という状況が続いている...

行けるところまで行くのだ。

自主製作も自主上映もツベコベ考えずに、やるっきゃないのだ！逆算して人生を考えることが出来るほど利口じゃないのだから。限りある命を生きるのだから...

死生観というほど高尚じゃないけど、6月に「がん」の手術を受けて、身に沁みてそう思うようになった。

《出逢ったことが、  
生きてきた証であるならば、  
別れることも生きてきた証なのだろう。  
（伊集院 静）》

出逢いと別れ...

我がヒューマンドキュメンタリーは、一人ひとりの生きてきた証の記録そのもの。

夢中になって、目の前の気になる人々を撮り続けてきた。「ヒューマンドキュメンタリー」という言葉さえ知らず、人にカメラを向けて撮り続けて、「伊勢さんは人間を描く作品が好きなんですか？」と、誰かに言われて、そうかも知れない気がついたくらいだ。

撮らないわけにはいかない、と思ったら、もうカメラが回っている、という感じで次々創ってきた。

自主製作・自主上映で映画を創るようになって、随分経ってから、「自主製作」のことをインディペンデントムービーと呼ぶのだ、ということの後輩の映画青年から教えてもらった。

「何だか伊勢さんの作品はホームムービーのようなテイストですね...」と言われてたりもする。シロウトくさいということかなあ？

そんな映画創りの典型が、“奈緒ちゃんシリーズ”かも知れない。スタッフはシロウトどころか、プロ中のプロの集まりだけだ。

「奈緒ちゃんに逢いに行く！」を合言葉に通い続けて、気がついたら40年を越える記録になった...。障がいがあり「長くは生きられない」と言われていた奈緒ちゃんが50歳になるまでのホームムービーは、出逢いのこと、別れのこと、生きてきた証のこと、「いのち」のことを、巧まずして語りかけてくれている。

長編処女作だった映画『奈緒ちゃん』の完成は1995年...。主人公の奈緒ちゃんを育み、奈緒ちゃんに育まれた家族と地域を描き続けたヒューマンドキュメンタリーに、一番育まれたのは、かんとくの私のような気もする...。そして今もまだまだ育てられ続けている。だから、やめられないんだ。

来春の完成に向けて編集集中の“奈緒ちゃんシリーズ”第5弾のタイトルは、『大好き～奈緒ちゃんとお母さんの50年～』。

ヒューマンドキュメンタリーは絵で言えば「肖像画」ということか？

“奈緒ちゃんシリーズ”をはじめ、私が創り続けてきた映画たちが「肖像画」のような佇まいで、ジッとこちらを見つめている気がする...。何かを言いたげに。

「頑張れ」と言ってくれているのか  
「しっかりしろ」と言ってくれているのか  
「ありがとう」と言ってくれているのか  
...きっと、見守ってくれているんだ。

出逢いと別れ、生きてきた証。

伊勢 真一